(C)十勝毎日新聞社

白樺 猛打爆発

帯三条に13―6 準決へ

春季 高校野球 十勝支部予選

【準々決勝・白樺学園―帯三条】白樺学園は２回１死満塁、矢野侍汰（右端）が左翼越えの本塁打を放ち10―０と大量リード。矢野はベンチ前で仲間とタッチを交わす

第4日は11日、帯広の森野球場で準々決勝の2試合を行った。午前は昨秋の道大会8強の白樺学園が満塁弾を含む3本の本塁打などで七回コールドの13―6で帯三条に快勝した。14日の準決勝で帯柏葉―帯緑陽の勝者と戦う。昨夏の北北海道大会決勝と同じ顔合わせとなった10日午後の準々決勝は、帯大谷がわずか3安打ながら好機を生かし、帯農に3―2で逆転勝ちした。序盤にもぎ取った3点をエース田中大輔（3年）、喜瀬創平（同）の継投と3併殺の堅守で守り抜いた。帯農はエース佐藤大海（同）が三回以降は無安打投球だったが、打線が好機に畳み掛けられなかった。帯工も3安打ながら四球を絡めて得点し7―5で勝利、帯北は15安打を放つも13残塁で敗れた。（岡部彰広、新井拓海、金野和彦）

元MLB名手ジーターほうふつ

矢野侍汰（じいた） 満塁弾

○…公式戦初本塁打は試合の流れをつかむ満塁弾となった。二回、この回2度目の打席に立った白樺学園の新クリーンアップ・矢野侍汰（じいた、3年）が初球の内角低めをたたくと、打球は左翼席へ。これで10―0となりチームは試合の流れを完全につかんだ。

父元気さん（43）が元MLBヤンキースのデレク・ジーターのファン。レギュラーを獲得したばかりの今春の公式戦初先発で、名前に負けない活躍を見せた。

「満塁だったので最低でも外飛を意識して打った。すごく気持ちよかった」と183センチ、90キロの大きな体を揺らした。

3学年上の兄球太さんの後を追って稚内東中から同じ白樺学園へ。冬のランニングメニューで102キロから体を絞り、キレが増した。引っ張るだけではなく、ジーターのように右方向への打撃も意識している。「甲子園を目指す。スタメンに入ったからには貢献したい」

◇準々決勝（11日）

帯三条 0000400 2
白樺学園 0100200 0 1× 136

（七回コールド）

【帯】河野、篠原、竹迫、高城―鳥海、星野、渋木、曽我、上林、植木―中島
【白】本塁打＝矢野、大宮、村井（白）
▽三塁打＝田中（白）
▽二塁打＝竹迫（帯）菊地、矢野、曽我（白）

打撃調子良かった

白樺学園・亀田直紀監督の話 思っている野球ができなかった。初めて投げた投手を、周りがもう少しカバーしてあげられれば。打撃はずっと調子が良かったが、こんなにつながるとは思っていなかった。

10点差でも諦めず 竹迫、投打で気迫

○…帯三条は大量リードされていた四回、1年生の点差で迎えた2死満塁の好機に、竹迫諒が二塁打で2点を返し、二塁上で両手を大きく掲げた。「（高校での野球に）適応できていなかったからうれしい」と、確かな手応えを得た。

竹迫は投げても三回途中に登板すると、2回⅔を投げ無安打に抑えた。スライダーやカーブが好調で直球もさえ、「強豪を抑えられたことは自信になる」

今後、投手としてはコースを突く際どい球を磨き、打者としてはミート力を強化する目標を掲げた。

帯大谷 堅守で4強

帯農に3―2逆転勝利

【準々決勝・帯大谷―帯農】帯大谷は２死二、三塁、糸瀬早人が左中間へ２点適時二塁打を放ち、３―１と勝ち越す

◇準々決勝（10日）

帯農 0100000 100
帯大谷 0300000 00× 32

▽二塁打＝糸瀬早（大）千場（農）

帯大谷は1点を追う二回、1死から連続四死球と暴投で1点を入れて同点とし、さらに2死二、三塁から糸瀬早の左中間適時二塁打で2点を勝ち越した。守っては三、七、九回に併殺を完成させ相手に反撃の機会を与えなかった。

帯農は二回2死二塁から田中の適時打で1点先制。七回に大久保と田中の連打などで1点を加えたが及ばなかった。先発の佐藤は序盤に乱れたがその後は立ち直り、5奪三振と力投したが序盤の失点が響いた。

【帯　農】

		打	安	点	振	球
⑥	清水	3	0	0	0	1
④	山下	3	0	0	0	0
③	千場	3	1	0	0	1
①9	佐藤	4	2	0	0	0
⑨	澁谷	2	1	0	0	1
⑦	大久保	4	1	0	0	0
⑧	田中	3	2	1	0	1
②	白幡	4	0	0	0	0
⑤	阿部	2	0	0	0	1
犠	盗	併	残	失		
2	0	0	6	0	28	7

【帯大谷】

		打	安	点	振	球
⑨8	大野	4	0	0	2	0
⑦	糸瀬早	4	1	2	0	0
⑥	火ノ川	3	0	0	0	1
①9	田中	4	1	0	1	0
③	三井	3	0	0	1	0
②	玉田	2	1	0	1	1
⑤	木下	1	0	0	0	1
5	山上	1	0	0	0	0
⑧	池上	1	0	0	0	1
1	喜瀬	1	0	0	0	0
④	岡山	3	0	0	0	0
犠	盗	併	残	失		
0	1	3	4	1	27	5

	回	者	球数	安	振	球	責
佐藤	8	31	106	3	5	4	3
田中	6⅔	26	88	6	0	3	1
喜瀬	2⅓	9	27	1	0	2	0

糸瀬早 昨夏大敗、雪辱の決勝打

北北海道大会決勝の雪辱を果たした。

帯農との北大会決勝は、捕手として出場していた兄亮太さん（現・札大1年）らをスタンドから応援した。2―19と大敗の試合は「兄は楽しくやっていたし悔しさはないと言ってなかった。同点に追いついて迎えた二回2死二、三塁の勝ち越し機で、糸瀬早人（2年）が左打席から左中間に流し打ちし二塁打。この2点打がチームに勝利を引き寄せ、昨夏の大会の組み合わせ決定直後に「お前なら打てるぞ」とメッセージをもらった。「心強かった。佐藤君の球を打てる感じがした」

この冬はパワーアップに努めた。ベンチプレスの挙上重量は25キロも増えた。兄からは打つ時に考え過ぎるなーとアドバイスももらった。「だいたい」しかし糸瀬は「自分は悔しかった。佐藤投手が今回の相手なので）絶対に打ちたいと思っていた」。亮太さんの激励も気持ちを後押しした。今予選代表決定戦で勝利した相手。兄が最終回2死走者なしから同点につながる三塁打を放ち、さらに延長で兄の支えの大きさや、努力の証しを大事な試合で示せたことを喜んだ。

準決勝で戦う帯工は、昨夏の支部予選代表決定戦で勝利した相手。兄からは打ててめちゃうれしかった」とサヨナラ打を放って勝利に貢献している。「小さい頃から尊敬する兄のようになりたいと思っていた。役割をしっかり考えてやれるべきことをやりたい」と意気込んだ。

帯工・瀧上反撃しのぐ

エースが緊急再登板

【準々決勝・帯工―帯北】４回２死一、三塁、帯北の角田聖剛が放った浅い中飛に、帯工の大澤陽翔中堅手が飛び込んで好捕

帯工が3安打ながら四球を生かし、中盤までに大きくリードした。初回、2四球で無死一、二塁から大澤の右前に落ちる先制適時打、さらに市岡、鳥宮の押し出し四球で3点を挙げた。四回にも4連続四球による押し出しや暴投で2点を追加。六回にも2連続四球から市岡の左前への適時打と押し出し四球で加点、7―1とした。

帯北は好左腕の松田輝が6回途中まで10奪三振ながら15四死球を与える乱調。打線は終盤の3⅓だけで8安打を集中し、2点差まで詰め寄ったが、中盤までの失点が重かった。

◇準々決勝（10日）

帯北 0100000 220 5
帯工 3002020 0× 7

▽二塁打＝深田（帯工）

帯工は、七回途中から再登板したエース瀧上大成（3年）が、帯北の反撃をしのぎ切った。

五回まで6安打1失点と好投し、ベンチの予定通り後につないだ。しかし市岡聡良（同）が捕まり七回途中からまたマウンドへ。八回には3連打を浴びながらも2失点で食い止めると、最終回1死一、二塁も得意のスライダーを織り交ぜて耐え抜いた。「練習でやってきたことを出そうと投げた」

昨秋と比べ、外の球でかわすだけではなく、ホームベース上で勝負できるようになったのが成長した部分。強敵を破った勢いを生かし、2季連続の支部代表を目指し突き進む。

【帯　北】

		打	安	点	振	球
③	花本	5	2	2	1	0
⑦	杉本	5	3	1	1	0
⑧	毛利	4	1	0	0	1
⑨	宮崎	5	1	0	2	0
⑤	田中	4	0	0	0	0
⑥	松田河	5	1	0	2	0
①	松田輝	3	2	1	0	1
1H	八重樫	0	0	0	0	0
④	中尾	1	1	0	0	0
H4	中西	2	2	0	0	1
H	米澤	1	0	0	1	0
②	三浦	0	0	0	0	0
H	川岸	1	0	0	1	0
②	常丸	1	0	0	1	0
H	角田	1	0	0	0	0
2	岩田	3	2	0	0	0
犠	盗	併	残	失		
1	0	0	1	3	41	5

【帯　工】

		打	安	点	振	球
⑥	大宮	3	0	0	1	2
⑨	中村	3	0	0	2	1
⑧	大澤	3	1	1	2	2
②	深田	2	1	0	0	3
③13	市岡	2	1	2	0	3
⑤	今井	3	0	1	3	1
⑦	田中	4	0	0	3	1
④	鳥宮	1	0	1	0	4
①31	瀧上	4	0	1	3	1
犠	盗	併	残	失		
2	0	0	1	4	1	2

	回	者	球数	安	振	球	責
松田輝	5⅔	31	145	11	10	15	7
八重樫	3	14	53	2	4	3	0
瀧上	5	22	82	6	5	1	1
市岡	1⅓	7	29	4	1	0	1
瀧上	2⅔	16	68	5	3	2	2

追い込まれ甘い球 佐藤、1投悔いる

帯農

○…帯農のエース・佐藤大海（3年）は立ち上がりが乱れ、失った3点が勝負を分けた。昨年7月の北北海道大会決勝では、帯大谷の強力打線に投げ勝った佐藤だったが、今回は小差で敗れた。

二回には適時二塁打を浴びて逆転された。「ボールが先行してしまい、変化球を投げたかったが（ストレートが）甘く入った」と佐藤。追い込まれた状況でも、勝負心を持ち切れなかったことを悔いた。

ただ、持ち直した三回以降、出塁を許したのは死球での1回のみ。自らのリズムをいかに早くつかむかが課題になった。

前回の経験から帯大谷に対して、「簡単にストレートで押していけない思ったので、キャッチャーと話し合って、打ち取るピッチングをしていた」。春からは1年生の白幡仁と組んでいる。佐藤は「盗塁されても刺してくれるので信頼して投げられている」としつつも、2人のさらなるかみ合いが飛躍への鍵だ。西川雄太郎監督は「白幡のスローイングの安定感を買っている。これから帯農をしょって立つ1年生」と、力を込める。軸となる投球への理解を深め合って、強力なバッテリーへと成長を遂げる。

準決も粘り強く

帯大谷・網野元監督の話 力のないチームなので、チャンスは3回しか来ないと言っていた。（結果として）2回しか来なかったが、選手はよく頑張ってくれた。準決勝は引き離されないよう、粘り強く戦いたい。

昨秋の経験大きく

帯工・竹岡秀晃監督の話 好投手を打てないのは分かっていたので、高めのストレートを振らないようにした。四球もヒットと同じ。よく頑張った。選手みんなの勝利だ。昨秋の経験が大きかった。

15四死球は課題も 巻き返しに手応え

帯北・田澤監督

○…帯北の田澤圭司監督は、先発の松田大輝（3年）について「持っている力はもっと高い」とした。松田は5回⅔を投げて1安打10奪三振の一方で、15与四死球が敗戦につながり精神面が課題になった。四回から岩田侑馬（同）が捕手としてリード。岩田は打撃でも七、八回に安打を放ち「追い上げられたのは夏につながる」（同監督）。敗れたものの、6点差からの巻き返しに、手応えを得ていた。